

令和6年度SSH運営指導委員会

■ 令和6年度 第1回SSH運営指導委員会

1 実施日時 令和6年7月4日(木) 14:00 ~ 16:00

2 実施場所 本校 視聴覚教室

3 出席者 【運営指導委員】川井 浩史 神戸大学内海地域環境教育研究センター特命教授 委員長
大野 照文 高田短期大学特任教授 副委員長
会沢 成彦 大阪公立大学大学院理学研究科教授
中西 敬 徳島大学環境防災研究センター客員教授
西岡 加名恵 京都大学大学院教授 欠席
【管理機関】西川 賢一 兵庫県立総合教育センター 情報教育研修課 指導主事
【本校】校長 山根 尚 教頭 名手健二 藤原守人
主幹教諭 難波 滋
教諭 平島拓真 小山卓也 山本 賢 下田貴子 福田秀志 谷 良夫 中村雅美
福本 稔 西村寅壮 村上一寿 浅井尚輝 佐々木智之 富田優次
実習助手 石崎陽子 瀧口 貴久

4 協議の概要並びに運営指導委員による指導助言の内容

(1) 本校のSSHの取組(現状)について

校長：5期に向けて、学校全体で取り組んでいるが、来年度、5期に向けてどのように進んでいけばよいか。／他の普通科高校への普及に、尼崎小田高校は貢献できるのではないかなと思うが、それを5期のテーマにしてよいのだろうか。

委員ら・指導主事：兵庫県の教育方針にとっても、SSH指定校は中心となることを期待している。

教諭：普通科の探究はグループで進めていかないと難しい部分もある。／探究学習を進める人数について、またご意見をいただきたい。／教科に取り入れた探究学習、教科横断型の探究的な学習の事例を探究マニュアルにまとめていかないといけない。／成果の発信をしないといけない。／SR科は、2年生のテーマ発表会を早い時期に行った。／類型では、個人での探究学習に取り組みさせる。

(2) 今後のSSH活動について指導助言

委員：校内連携や、地域連携が進んでいる点は評価できる。それをいかに発信するか。／次の5期目を考えるなら、高校生サミットを推進してもよいのでは。／サミットでの活動をSSHの活動に活かしたら。／地域の産業との連携をもっとアピールしてみてもどうか。／地域の課題を洗いだし、整理することが大切。／サミットに参加する学校は地域が様々なので、「防災」等のテーマでまとめていけないか。

委員：質問リストは無くてもよい。こういうものは企業のものが多いので、教育心理学等の知見を活かして考えてほしい。／また、質問がその場でできないことは悪いことではないのではないかな。

委員：質問する力を生徒につけるには、場数を踏ませてトレーニングさせるのがよい。／生徒が互いの質問を評価するのもよいのでは。／質の悪い質問には悪いと言ってやる。／上級生と下級生の交流も大切。

委員：世の中の技術システムは進んでいく。だからこそ、生徒が「食いつく」という感覚を大切にしたい。
教員：質問がなかなかできない生徒は、質問ではなく感想を書かせてもよいのか。

委員：感想でもよい。他者の発表内容を理解していないと感想は書けない。形だけの質問をさせることの方がネガティブではないか。理解して書いてもらえる感想の方が望ましい。

委員：質問する力とは、聞く力ではないか。質問できない生徒というのは、発表を聞いた時に、頭の中でその発表内容を再構成できていない。再構成できていれば、発表内容とずれる部分が必ずでてくるはずで、それが質問になる。質問する力、ではなく、聞く力だと捉えて指導に当たってみてどうか。／マニュアルを作ることは労力が大きい。そして読んでもらえない。マニュアルの目的が発信なのであれば、高校生サミットの内容をもっと発信してみてもよいのでは。／理系のテーマは複数人で取り組んでほしい。

教員：地域課題には人口減少や高齢化問題など文系よりのものが多い。／企業からは即戦力の人材ではなく、大学へ進学し、別の企業に就職したうえで、セカンドキャリアとして地域に帰ってきてほしいという声も多い。地域産業との連携を理系分野でどのように行えばよいか。

委員：一見すると文系寄りの問題に思えても、実は理系寄りのテーマであるものも多い。

教員：仮説検証型ではない探究をどのように高校で実現していけばよいか。

委員ら：数学物理学分野、生物環境学分野では、とにかくやってみることが大切。

5 兵庫県教育委員会による指導助言内容

他校の取り組み事例として、SSHの卒業生を呼んで、ミニ講座をしている例もある。また、研修センターの講座にはSTEAM教育に資するものもある。活用してほしい。

■ 令和6年度 第2回SSH運営指導委員会

1 実施日時 令和7年2月1日(土) 16:00 ~ 17:00

2 実施場所 本校 視聴覚教室

3 出席者 【運営指導委員】川井 浩史 神戸大学内海域環境教育研究センター特命教授 委員長
大野 照文 高田短期大学特任教授 副委員長
会沢 成彦 大阪公立大学大学院理学研究科教授
中西 敬 徳島大学環境防災研究センター客員教授 欠席
西岡 加名恵 京都大学大学院教授
【管理機関】西川 賢一 兵庫県立総合教育センター 情報教育研修課 指導主事
【本校】校長 山根 尚 教頭 名手健二 藤原守人
主幹教諭 難波 滋
教諭 平島拓真 小山卓也 山本 賢 下田貴子 福田秀志 谷 良夫 中村雅美
福本 稔 西村寅壮 村上一寿 浅井尚輝 佐々木智之 富田優次
実習助手 石崎陽子 瀧口 貴久 恒松 法子

4 協議の概要並びに運営指導委員による指導助言の内容

(1) 本日の研究発表会について

校長：来年度、クロスカリキュラムのような形で、多くの教員が探究に関わる仕組みを仕掛けていきたい。
委員ら：1人でやっている探究は、良い部分もあるが、相互のチェックが入りにくい。協働の作業があった方が良いのではないかなと思う。／面白い発表があった。ただ、実験については、目的と手法が一致しなくなっているものがあった。／今年は普通科の探究に聞きごたえがあった。身近なところから始めていてよかった。／5期にチャレンジするのは良いが、どんなテーマが採用されるかはわからないので、振り回されすぎない様にしてもらいたい。SR科の発表に女子がいたのはよかった。／今回のSR科の探究の中には目的やゴールをもう少し設定してあげた方が良かったものもあるのではないかな。

委員ら：聞いている側は聞いているだけになっているのか？

教員：コメントシートは配っている。ただ、聞いている側がメモしているだけになっている。

委員ら：そのコメントを、発表者に見せる仕掛けがあっても良い。

校長：タブレットなどを使って、質疑応答ができるような仕組みも検討したい。

教員：スライドの表示について、全体講評の場で指摘があったが、どの程度の分量が適切か？

委員ら：スライドの中身によっても分量は変わるので一概には言えないが、生徒同士でスライドの文字を読めるか試させたほうが良い。

委員ら：ポスター等での表記が「作成」になっている。通常の実験等では「製作」を用いるのではないかな。

教員：語彙などは、チェックリストやマニュアルで対応することができたかもしれない。検討したい。

委員ら：探究以外の教科の授業で、対話を重視してほしい。生徒に探究と教科の区別をさせないように。

(2) 今後のSSH活動について指導助言

教員：普通の高校で、課題研究のノウハウを蓄積できていることを強みとして5期目を目指したい。／台湾の姉妹校との連携も、国際的な取り組みとして加えていきたい。／普通科の探究を1年生から始めるようにしていきたい。具体的には教科横断を考えている。／探究は、SR科で行っている過程の評価を普通科でどう実現するか。／数値評価したことの最終評価をしたい。／他校との連携も課題。／重点枠での学びは、外部機関との連携を図り、これまでの取り組みを活かした展開をしたい。

委員ら：SR科では、今、教科横断の取り組みをしているのか？

教員：探究してきたことを英語で発表するなどしているが、取り組みとしてはやや弱いところである。

委員ら：教科横断もよいが、「探究」の「基礎」を本気で考えるならば、母国語で考える力を育成していかないといけないのではないかな。／探究基礎と教科横断は同じことなのかよく考えてほしい。

校長：校長としては、教科横断によって、職員間の連携を図り、校内の探究に対する前向きな職員の気運を高める目的もある。これについては、ぜひとも実施してもらいたいと考えている。

委員ら：今後、指導要領の改訂もある。教科横断もよいが、それぞれの教科の中で、しっかりと核になる考え方を育めるのではないかな。科学的に探究する力についても、教科の中で育む視点も大切にしたい。／GIGAスクール構想やデジタルと探究の組み合わせは、テーマになり得るかもしれない。

委員ら：台湾のどの高校と連携するのか。／台湾の高校は、各校が特色を打ち出している。

5 兵庫県教育委員会による指導助言内容

本日の指導助言などを、次年度以降の取り組みに活かしてほしい。／重点枠が、兵庫県内で少なくなっているため、取り組みには期待している。